

巻 頭 言

学校長 結 城 陸 郎

この研究紀要も号を重ねて第15集を公にすることになった。年毎の研究成果が一層一層積み重ねられてここに15層の塔が築き上げられたわけである。この塔が本校の歴史を貫ぬいて来た精神を心柱として、全精力の結晶としての一つ一つの論作が梁となり貫となり或いは斗拱となって、しっかりと組合わさって、中天高くその姿をそびえ立たせてくれるとともに、急速度に変化・発展する社会に即応する新しい教育実践への指標としての役割を果たすものとして仰ぎみられるに値いするものであることを期待する。さて、昭和44年度本校の共通的研究課題は、前年度に引続いて、「中等教育の改造をめざして」であった。この課題設定の意図と目的は、既に言及したところであるが、要するに、高校教育の普及度の拡大・準義務教育化・大衆化傾向の中で、これを前期中等教育としての中学校教育と分離・断絶の関係においてではなく、広く中等教育・中高一貫の視点に立って考察・対処しなければならない必要性が生れて来た。さらに、この趨勢とのかわりにおいて、いづれの高校においても生徒構成の面において、多層化の現象が普遍化する傾向にある。このことはいうまでもなく、伝統的な高校教育の理念や教育体制を超えた新しい志向性を求めなければならなくなった。高校教育における到達目標の検討・新しい教育内容の設定・指導形態・方法の改善、総じていわゆる教育の現代化が図られなければならないようになって来た。或いは情報化社会など社会の変化が及ぼす影響は従来とは比較にならない程の大きさを示し、全体的にも生徒個人に対して、教育的視点に立って新たな教育的営みを必要とするに至った。このような対応策・具体案の作成は、しかし、決して容易な業ではない。諸種な試みの、長期にわたる努力の集積の上に期待させる。こうした観点に立って、付属学校としての本質からみて、ことに中高一体の学校形態をとる特殊に鑑みて、当付属学校においてこそ設定すべき研究課題であると考えたからである。

しかして、広範・多岐にわたるこの課題を、5つの分野に区分し分担した。その1つは、「教育課程」の問題であるが、それにおいてもっとも中心のとり組まれたものは、いわゆる生徒構成の多層化に即応する学習形態の問題であり、最初の着手として能力別・学力別クラス編成による学習の試みであった。そこには可成顕著な効果を認めることが出来たと同時に、再考

・検討を要する面も否定出来ない。こうした両面を勘案しながら、新たな形態の実践に入り、その成果を見つめようとしている。その2は、「指導方法」の問題としての教育器機の利用に関する面である。教育における器機の利用は、教育方法の現代化の趨勢の中で大きな地位を占めることはいうまでもない。この現状に即して、学部との緊密なる連繋の中で、態勢の整備に当たっているが、その一端として試みられたものの成果としてこれを見ることが出来るであろう。その3は、前二者とのかわりにおける学習効果の実証的な検討・追跡であり、「長期的観察指導」の問題である。もろもろの教育的営みが、短期的な視点から長期的視野の中からの評価・反省によって、望ましい教育課程の編成が期待されるであろうとの立場である。その4は、「生活指導」の問題である。社会情勢の急速な変化と発展とは、非常な敏感さを以て生徒の日々の生活に反映されて来る。生徒個人に対して、或いは集団としても。こうした意識に立って、本年度新たにカウンセラーの制度を設定した。これには諸種の問題が内在することは広く知られている所であり、それが全国的視野に立っての現状を生み出すに至ったものであるが、しかし、その緊要性の意識のもとに、精力的な活動とともに、課題の解決に努めている。他方、集団生活指導の問題として、「生徒会活動の指導」に関心が向けられなければならない。まさに本年度は激動の年であり、さらにその度を加えるであろうことも予想されるが、望ましい教育的な指導態勢が期待されなければならない。その5は、「管理・運営」の問題である。研究・実証の学校として、モデル校として、はたまた教育実習校としての付属学校の使命は、「よい学校」としての基盤の上に達成されるのであり、それは、広狭二義の管理・運営体制の確立、直接的には狭義管理・運営体制の整備と運用に俟つことが大きい。ここ数年来、付属学校の在り方についての関心がとくに高まっている。それには諸種の理由が考えられるが、就中伝統的・慣行的な要素が強く働いていることが否定出来ないであろう。それらの伝統や慣行にはそれなりの必然性があり、文字通り尊重さるべきすぐれたものも存在する。しかし同時に、中には、それが生み出された真の精神が失なわれ、形骸化した形で、伝統・慣行として存在するものも少なくない。これを今日的視点に立って改善が図らるべきものも少なくない。いわば

「体を学ぶに非ず，心を学ぶ」との伝統・慣行に対応する歴史的意識に立って対応すべきものとする。こうした意図に立っての試みが示されているといえよう。しかしそれは，理想と現実との接点との発見といった現実的・漸進的歩みであり，終着点に向っての第一歩としてのものであることを付言する。

以上のような共同・共通の問題解決への努力とともに

に，それぞれの教科における諸種の問題の探究が，前者を，より稔りあるものとする原動力として努められている。これらの成果が，それぞれの領域において高い地位を占めることを期待している。

ともあれ，ここに第15集を公けにするに当ってその素描を試みるとともに，大方の御高批を仰ぎ，明日へのかけがいのない糧と致し度い。